ブラジル連邦共和国レジストロ 植民地における日系移民住宅の 構法について

— 深澤家住宅を対象として —

ON THE CONSTRUCTION METHOD OF JAPANESE IMMIGRANT HOUSING IN REGISTRO COLONY, BRAZIL

— A case of Fukasawa family house —

田中和幸 — * 1 渡邊裕子 — * 2
須崎文代 — * 3 内田青蔵 — * 4
脇岡明美 — * 5

Kazuyuki TANAKA — * 1 Yuko WATANABE — * 2
Fumiyo SUZAKI — * 3 Seizo UCHIDA — * 4
Akemi HIJIOKA — * 5

キーワード：

ブラジル移民, レジストロ植民地, 日系移民住宅, 窓枠形状, 断面形状, 文化財

Keywords:

Brazilian immigrant, Registro colony, Japanese immigrant housing, Window frame shape, Cross sectional shape, Cultural property

The Fukasawa family house, completed in 1936, is one of the Japanese immigrant housing in Registro. The authors investigated the building and found that the pillars on the west side of the “shuoku” were disjointed because they were arranged according to the hut structure of the “kôjô”. On the other hand, it was found that the pillars on the east side were arranged the design from the outside. Next, two types of window frames, “sliding type” and “ôdome”, were used, and it was clarified that these window frames had complicated shapes and were constructed by highly skilled Carpenter Hayashi.

1. はじめに

日本の奨励政策であったブラジル連邦共和国（以下、ブラジルという）への移民は、1908年に笠戸丸がはじめて日本人を送り届けてから集団移民が終わる1973年までに約25万人が海を渡った。現在でも多くの日系人が生活しているブラジルのサンパウロ州には、かつて200を超える植民地が築かれ¹⁾、そこには人々の生活する住まいが建設された。ただ、時代の流れとともに当時の住まいは失われ²⁾、かつての居住空間を知ることは難しくなるなか、レジストロ市は現在でも日系人のコミュニティが活発で、日本の文化や習慣が根付いていることもあり、戦前に竣工した日系移民に関する施設が残されている。

レジストロは、イグアッペ植民地の一つで、桂とセッテパラスからなる植民地として構成され、最多の移民を受け入れてきた背景もあり、イグアッペにある日系移民に関する14カ所の施設は「ヴァーレ・ド・リベイラの文化風景」として、2010年にブラジルのIPHAN³⁾によって文化財へ登録された。そのうち5カ所がレジストロ植民地にある日系移民住宅⁴⁾で、筆者らは2015年度から現地調査を行い、日本建築学会などで成果を報告してきた^{2)~4)}。レジストロ植民

地の北西部に位置する深澤家住宅（写真1）は、日系移民住宅の一つであるが、長いあいだ空き家となっており建物の腐朽が著しかったことからIPHANを通して文化財修復の経験がある現地の専門業者によって工事が行われた。その方法は、軽量化のために瓦葺き屋根の一部を鋼板とし、害虫によって腐蝕した野太い小屋梁は細いユーカリの丸太に置換され、その周囲の隙間は塞がれずに光が差し込み（写真2）、朽ち果て交換された木材は建物の周囲に放置されたままの衝撃的なものであった。

本稿では、私たちの先祖が異国の地で築いたレジストロ植民地の日系移民住宅について、現代の日本人へ周知するとともに、これまでの既往研究^{5)~12)}では触れられていない建築構法を明らかにし、今後の修復において適切な方法が採られるための基礎資料となることを目的とする。

方法は2018年に実測調査を行った深澤家住宅を対象に、戦前のレジストロ植民地で竣工し、現存している日系移民住宅を通して外部の窓枠形状と建物の断面形状に着目し考察を行った。

2. 深澤家住宅について

深澤家の建物は、はじめ池上熊太郎氏の所有であったという⁵⁾。入植してから20周年を迎え発行された『伯刺西爾イグアッペ植民地廿週年記念写真帖』¹³⁾（以下、『廿週年写真帖』という）の地図に彼の氏名を確認でき⁶⁾、池上氏が所有する建物では蒸留酒のビンガと砂糖の製造を行っていたことが紹介されている（図1）。

池上氏はのちに深澤家の長男であった伯一郎氏を養子に迎え、深澤家が所有する二階建ての建物が『イグアッペ植民地開拓五拾周年

写真1 深澤家住宅の外観

写真2 修復後の状況

本稿は2021年度日本建築学会大会（東海）¹⁾での口頭発表に加筆修正を加えたものである。

¹⁾ 近畿大学工業高等専門学校総合システム工学科 准教授・博士（工学）
〒518-0745 三重県名張市春日丘7-1

²⁾ 文化学園大学造形学部建築・インテリア学科 准教授

³⁾ 神奈川大学工学部建築学科 特別助教・博士（工学）

⁴⁾ 神奈川大学工学部建築学科 教授・工博

⁵⁾ サンパウロ連邦大学建築技術コース 教授・博士（建築学）

¹⁾ Assoc. Prof., Dept. of Comprehensive Eng., Kindai Univ. Technical College, Dr.Eng.

²⁾ Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Interior, Bunkagakuin Univ.

³⁾ Assist. Prof., Dept. of Architecture, Kanagawa Univ., Dr.Eng.

⁴⁾ Prof., Dept. of Architecture, Kanagawa Univ., Dr.Eng.

⁵⁾ Prof., Technical Course in Building, IFSP, Dr.Arch.

記念』¹⁴⁾ (以下、『五拾周年記念』という)に掲載されている(図2)。深澤家には、この角度から撮影された古写真が保管されており、裏面に「1936年10月26日」¹⁵⁾と記されていることから、この年には建物が竣工していたと判断できる。

図1 『廿週年寫眞帖』に掲載された池上氏の建物¹³⁾

図2 『五拾周年記念』に掲載された深澤氏の建物¹⁴⁾

2-1 「主屋」と「工場」の建物

深澤家住宅は現地調査によって、二階建て住居の「主屋」と平屋建てで土間からなる「工場」に加え、トイレや台所が備わった「水回り」によって構成されていることを確認し^{注7)}、現状図面を作成した(図3)。なお、『廿週年寫眞帖』には「工場」が、『五拾周年記念』では「主屋」の建物が写されていることから、現状と照らし合わせれば「工場」が一番古く、次いで「主屋」が新築され、最後に「水回り」が増築されたことになる。

まず「主屋」は、桁行12.8m×梁行5.5mの木造総二階建て、和小屋組にフランス瓦を葺き、4寸5分勾配の寄棟屋根が掛けられている。外観は大壁造りと真壁造りを併用しており、前者は西面以外の2階とベランダのある1階部分に、後者はベランダのない1階と西面、四隅の柱が該当する。四隅は通し柱、他は胴差で分かれる管柱で、建物の外周部には地盤面より高さ50cmの煉瓦基礎が巡らされ、内側は独立基礎となっている。基礎の上端に据えられた土台から胴差までは2.455m、胴差から軒桁までは2.763mである。

1階には4室あり、北側の5.5m×6.1mの部屋には(写真3)、床が張られていないものの土台にある根太の痕跡から、かつては板張りであったことが分かる。なお、部屋の中央に立つ柱は腐朽した2階の床梁を支える仮設部材である。

この南側には2.75m×3.0mの小部屋が2室並び、東側の部屋は板張りだが、階段のある西側の小部屋は土間であるものの根太の痕跡があることから、かつては板張りであったと判断できる。ちなみに、扉の位置より西側の小部屋へは北側の部屋(図3:範囲イ)から、東側の部屋へは南側の部屋(図3:範囲ロ)からの往来が可能である。

1階の南側に位置する5.5m×3.7mの部屋(写真4)は、東面に玄関扉が設けられ、片流れ屋根の掛かるベランダよりアプローチする。現在はベランダと部屋には段差があるものの、土台にある根太の痕跡から、かつてはフラットであったことが分かる^{注8)}。なお、1階の部屋は根太天井で、壁面は土壁に白色の塗装がなされている。

2階へは、1階南側の部屋を通りササラ桁の階段を上ると幅1.8m

写真3 1階北側の部屋

写真4 1階南側の部屋

の廊下に繋がり、突き当りには1.8m×2.3mの小部屋がある。廊下に沿って東側には3.7m×3.0mの部屋が3室並び、南側には2.7m×3.7mの部屋が2つ並び(写真5)。

2階は廊下を含む全室で天井が張られ、小幅板を互い違いに張った大和天井に、面皮のある柱を用いた数寄屋風の意匠で(写真6)、壁面は1階と同様に土壁の仕上げに白色の塗装がなされている。

写真5 2階南側の部屋

写真6 数寄屋風の天井と柱

外壁面の開口部について、2階は全て回転欄間付きの外開き木製ガラス窓であるが、南側にある2つの部屋の窓には内開きの木製錠戸が建て込まれている。1階の窓については、北側の部屋に内開きの木製錠戸が建て込まれ、南側の部屋は外開きの木製ガラス窓となっている。

次いで「工場」は、桁行12.6m×梁行9.2mの木造平家建てに寄棟屋根が掛けられる。壁は煉瓦積を基本とし柱型をあらわし外部は全体を塗籠めている。内部は土壁によって間仕切られ、「水回り」部分と接する窓からは煉瓦の壁体が見え二重壁となっていることから、当初は全体を土壁としていたが、後世の人らによって煉瓦へ置換されたことが分かる(図3:壁芯ハ)^{注9)}。

内部は東側の3.0m×9.2mと西側の9.7m×9.2mの二室からなり、後者の空間には支柱がなく土間である(写真7)。室内の北面と西面の仕上げは外壁と同じであるが、南面と東面は木製の柱が表れた真壁造りである。「主屋」に接する部屋は土間となっているが、根太の痕跡を確認できることから、かつては板張りであったことが分かる(写真8)。

写真7 西側の空間

写真8 東側の部屋

ただ、「工場」には天井がなく和小屋組みが露出している。軒桁に大梁が架かり、それに中引き梁がのり小屋束の立つ二重梁となっている。二重梁の両端には母屋が架けられ、中央には棟木を支える小屋束が立つ。棟木から軒桁へ向かって丸太の垂木が架けられ、屋根勾配は4寸5分である。屋根葺き材はスパニッシュ瓦を基本としているが、前述のとおり妻方向の屋根には後補材の亜鉛鋼板が葺かれている。ちなみに、野地板は葺かれず小舞へ直接、屋根葺き材が固定されている。

2-2 「主屋」の柱割り

レジストロ植民地における日系移民住宅の構法に着目したロジェ

図3 深澤家住宅現状図面

リオの論考によれば、柱は半間毎に立つことが指摘されている¹⁰⁾。ここでは実測調査に基づき「主屋」の柱割寸法(図3:東側立面図・西側立面図)を図示し、「主屋」と「工場」の関係について述べる。

「主屋」の2階西面に立つ柱は「工場」の棟木に加え母屋と軒桁の位置にも合っていることから、この部分は「工場」の梁行寸法に合わせて建設されていたことが分かり、史料に基づく建設順序と同じである。続いて、「工場」の間口にあたる「主屋」の窓寸法と壁寸法について述べる。東面に設けられた7ヵ所の窓寸法は芯々906mm~927mmで、平均914mmとなり、ロジェリオが指摘する半間と近似を示している。ところが、壁寸法は芯々1051mm~1207mmで、平均1080mmとなり、ロジェリオが指摘する半間よりも伸びていることが分かる。

筆者らは、レジストロ植民地において戦前に竣工し現存している日系移民住宅を調査したところ、壁寸法は半間よりも長い箇所や短い箇所があるものの、窓幅はどの建物においても半間となる⁴⁾ことを確認しており、「工場」が接する「主屋」の部分においても同じであった。

また、筆者らはレジストロ植民地の日系移民住宅では半間幅で一体化した窓を横架材のあいだへ自由に配置し、残りの部分を壁にする施工方法が採られていたことを明らかにしており³⁾、「工場」に接する「主屋」西面の壁寸法は、これに倣いバラツキが見られる。その一方で2階東面の北側にある同形状の3室のうち、両端の居室は中央に、真ん中の居室は両脇に窓を配置することで、中央の壁寸法が1207mmと最長となり、残りの壁で均等に割り付けていることから、外観のデザインを重視したことによるものであったと考えられる。

3. 「主屋」の窓枠形状について

レジストロ植民地における日系移民住宅の外観は、史料や現地調査などから真壁造りと大壁造りが確認できるものの、地域性や年代別による傾向は見られなかったことから、そこには所有者の意向が強かったものと推察でき、以下、両者の窓枠形状について述べる。

3-1 真壁造りの窓枠

真壁造りとなる「主屋」の1階北面の窓台が崩落している箇所があり、実測調査を行ったところ柱の外側は欠き落とされず20mm残されていた(写真9)。また柱の仕口には、ほぞ穴がないことから窓台は室内側から外部に向かって押し込む「スライド型」であったことが、建物に残された痕跡から確認できた窓台の取り付け方法を立体図で表した(図4)。

写真9 「主屋」の真壁造り窓枠 図4 「スライド型」の立体図

現地調査を行った沖山剛造家住宅でも真壁造りの窓枠が採用されているが、深澤家住宅の窓枠形状とは異なり、窓台が柱へ食い込む「欠き込み型」であることを現地調査で確認した(写真10)。

窓台がはまる柱は20mm欠き込まれ、窓台が崩落している柱には、

ほぞの痕跡があることから(写真11)、窓台は両側の柱から挟み込んで施工されていることが分かった。

写真10 「欠き込み型」の窓枠

写真11 柱に残されたほぞ穴

3-2 大壁造りの窓枠

大壁造りである「主屋」2階の東・西・南面とベランダのある1階窓枠のコーナー部は「大留め」となっている(写真12)。

深澤家住宅では「大留め」の納まりを確認できなかったことから壁面が崩壊している六川家住宅の窓枠を調査し、以下の形状となっていることを確認した。

柱は115mm角の正方形断面だが、土壁が塗られる部分の柱は40mm削られている。窓台が収まる外部のコーナー部は45°に加工され、柱の室内側は幅100mmで15mm欠き込まれ、この形状が室内側に表れており、立体図によって外部から室内側へはめ込まれていたことが分かった(図5)。

写真12 「大留め」の窓枠

図5 「大留め」の立体図

大壁造りの窓枠には、「大留め」とは異なる「合決り」が天谷家住宅で採用されている。ただ、ここでは納まりを確認できないことから、清水家住宅兼製茶工場の「合決り」(写真13)を調査したところ、土壁が塗られる柱は20mm削り取られており、立体図によって窓台が外側からはめ込まれたものであることを確認した(図6)。

写真13 「合決り」の窓枠

図6 「合決り」の立体図

3-3 窓枠形状から見える大工と竣工年

ロジェリオはレジストロ植民地での日系移民住宅の調査を踏まえ、真壁造りで窓の両脇に立つ柱のほぞ穴に窓台がはめ込まれ、くさびを使用し固定する「地獄くさび」と、大壁造りでは「合決り」や「大留め」など4つの窓枠形状をイラストで紹介¹⁰⁾している(図7)。

深澤家住宅の大壁造りで採用されている「スライド型」は、外部に面する部分の柱を全て欠きとらず一部を残していることから、雨

漏りが発生しにくく、外部からはスッキリとした納まりで見栄えが良いものの、「欠き込み型」と比較すると加工が複雑であることが分かる。

図7 ロジェリオが描いた窓枠形状のイラスト¹⁰⁾

さらに、真壁造りで採用されている「大留め」について、外部からはロジェリオの描いたイラストと同様であるが、窓台が下がらないよう室内側は柱へ食い込ませた形状となっており、「合決り」と比較すれば、複雑であることが分かり「スライド型」と併せ、この納まりの窓枠形状もロジェリオの論考にはなかったものである¹⁰⁾。

このように複雑で高い技量が要求される窓枠を採用している深澤家「主屋」の施工に携わった大工の氏名は棟木などに残されていない。ただ、当家の敷地に建ち、軒反りの屋根が掛かる1929年竣工の聖公会の施工に従事したのは日本人大工の林今朝士であることを踏まえれば、「大留め」と「スライド型」の窓枠形状が採用されている「主屋」にも林が関与した可能性は高いと言える^{注10)}。

ちなみに『廿週年寫真帖』へ掲載されている日系移民住宅のうち「大留め」を用いている件数は限定的であることから、この形状の窓枠は写真帳が発行された1934年前後から広まったと推察される。

その一方で、真壁造りの窓枠となる「欠き込み型」は、外観からの目視に留まるが1919年に竣工し明治村へ移築されている久保田家住宅や『廿週年寫真帖』に掲載されている多くの住宅をはじめ、レジストロ植民地の前に入植が始まっていた桂植民の住宅^{注11)}にも、この窓枠が採用されていることを踏まえれば、資機材が限られ大工を本業としない日系移民でも建設に従事した第二期の最初期から住宅の窓枠に採用されていた可能性が高かったと考えられる。

4. レジストロ植民地における二階建ての日系移民住宅について

熊谷廣子は、レジストロ植民地において二階建ての日系移民住宅が多いことについて、他の植民地では見られない特異な傾向であったと述べているが、その理由については詳らかにしていない⁷⁾。

ここでは戦前のレジストロ植民地で竣工し現存している二階建ての日系移民住宅である深澤家住宅と沖山スズ家住宅、天谷家住宅に加え、工場として文化財に登録され天谷家の長男である捨吉氏が所有し天谷家住宅と同じ大工である南保外吉によって施工された天谷捨吉家住宅、さらにはレジストロ植民地から明治村へ移築され、わが国の登録有形文化財となっている久保田家住宅を対象に分析を行った。

4-1 深澤家住宅の1階の使われ方

現在の天谷家住宅の1階は、コンクリートの土間の作業場であり、久保田家住宅の1階も煉瓦が敷き詰められ倉庫として使用されていた。天谷捨吉家住宅では、板張りで室内に取り込む増改築がなされているが、現地調査によってコンクリートの土間に直接板が張られ

ていることを確認した。

その一方で、沖山スズ家住宅の1階は床を上げ板張りの室内は寝室と居間に使用されているが、この建物はレジストロ植民地内に移築されており³⁾、竣工時の1階の用途については不明である。また、本稿で対象としている深澤家住宅の1階はあげ床の板張りであるが、長いあいだ空き家となっており、各室の使用法は不明である。ただ、現在は床板が外され土間となっている2室(図3:範囲イ)と、床板が張られている2室(図3:範囲ロ)とは扉を介した動線が確保されていないことから、両者の用途が異なっていたと言える。前者については「工場」と繋がり、後者と比較した際の床の占有率が大きいことを踏まえれば、1階は製造した商品などを保管しておく倉庫とした非居住空間としての意向が強かったことが分かる。

4-2 1階と2階の階高

1階を土間とする天谷家住宅と天谷捨吉家住宅の階高に着目すると、前者は土台から胴差までが2.4mで胴差から軒桁までは3.185m、後者は土台から胴差までが1.935mで胴差から軒桁までは2.937mで、2階の階高は1階の階高よりも大きい値となっていた。

また、1階をあげ床としている沖山スズ家住宅は、土台から胴差までが2.675mで胴差から軒桁までは2.851mとなっており、2階の階高は1階の階高よりも大きい値であった(図8)。さらに、1階をあげ床としている深澤家住宅の土台から胴差までは2.475m、胴差から軒桁までは2.763mとなり同様の傾向であった(図3:A-A断面図)。

図8 二階建ての日系移民住宅における断面形状と階高

以上の結果を踏まえると、1階の階高を低く抑えた断面形状は日本における一般的な二階建て住宅とは異なっており、レジストロ植民地における二階建ての日系移民住宅は2階を主要な居住空間として、1階は非居住空間として建設されていたことが考えられる。

そこには、レジストロの高温多雨の気候から逃れる為の工夫で、床を地面から切り離すことは、日系移民住宅に見られる特徴であることをロジェリオも指摘している¹⁰⁾。さらに、日本人大工による高い技量が備わっていたこともあり、限られた資機材のなかで平家建てよりも施工が難しい二階建てが普及することができたと考えられ

る。

5. まとめ

レジストロ植民地で現存している日系移民住宅は第二期に該当し日本人大工の手によって建設され居住性が向上した。そのなかで、外観に影響しない深澤家「主屋」の西面や、久保田家住宅に見られるように第二期の初期に該当する 1910 年代の日系移民住宅は柱間寸法にバラツキがみられた一方で、1930 年頃からは柱間寸法に規則性が見られるようになり、外観のデザインが重視され始めた。深澤家住宅は両者を備えた好例にあり、当家の「主屋」を通して窓枠形状にも変化が見られるようになった。既往研究で記されている窓枠形状とは異なる、耐久性やデザインを重視したことによるものが登場し、そこには高い技量を持っていた林今朝士が存在が密接にかかわっている可能性が極めて高いことが推察される。

このように日本人大工がレジストロ植民地で活躍したことで、他の植民地には見られない二階建ての住宅が多く建設されるようになったと考えられる。

ロジェリオによれば、レジストロ植民地の日系移民住宅は移築可能な架構形状となっていることを特徴に挙げている¹⁰⁾。移築されている沖山スズ家住宅では片側の柱を「スライド型」、もう一方の柱を「欠き込み型」とする箇所が見られる。これは移築の過程で劣化した部材を他の住宅で生じた転用材を使用したものであると推察されるが、建物の工事の変遷を示す重要な手掛かりである。

レジストロ市にある文化財建造物の修復には疑義を呈することから、建物をしっかりと調査したうえで従来の研究報告とは異なる構法があることも視野に入れ、建物の変遷過程を示す痕跡の扱いを熟考しながら修復がなされ、私たちの先祖が異国の地で築き上げた日系移民住宅を後世に正しい形で伝えていく保存・修復方法が切望される。

謝辞

本稿作成にあたり、現地調査ではレジストロ日伯文化協会副会長福澤一興氏、建築研究家の米田誠士氏をはじめ、関係者の方々より多大なるご尽力を賜りました。ここに謝意を申し上げます。

注

- 注 1) 海外興行株式会社によって発行（1930 年 2 月 5 日）された「伯刺西爾国サンパウロ州地図」に記されたデータによる。
- 注 2) レジストロ郷土史会（ブラジル サンパウロ州レジストロ植民地アーカイブ 建物写真から見る村と町の風景、私家版）によれば、レジストロ植民地で戦前に竣工し現存している日系移民住宅は 10 件程度である。
- 注 3) IPAHN は Instituto do Patrimônio Histórico e Artístico Nacional（国立歴史美術遺産院）の略称。
- 注 4) 登録名は、7. Residência Fukasawa, 8. Residência Gozo Okiyama, 9. Residência Sra. Susu Okiyama, 10. Residência Família Hokugawa, 11. Residência Família Amaya で、番号は IPHAN の登録順による。
- 注 5) 前掲、注 2)。
- 注 6) 参考文献 13) に掲載された地図によれば、当該敷地は 362 番と 364 番である。ちなみに『廿週年寫眞帖』には建物の竣工年は記載されていない。
- 注 7) 建物の名称については、便宜上本稿で名付けたものである。
- 注 8) 床には畳が敷かれていた痕跡はなく、玄関の框も見られないことから室内は靴で生活していたと推察される。
- 注 9) 「工場」の壁面のうち、「水回り」と接する東側は二重壁だが、それ以外の部分には壁がないため、当初は開口部や吹き放ちであった可能性が推察される。

注 10) 参考文献 9) には、深澤家住宅の建設を行った大工は聖公会の建設に従事した「WADA」と記されているが、聖公会の建設を行ったのは林であり、誤りであることが分かる。ちなみに、林は日本で大工をしており 1919 年に渡伯しているが入植後はコーヒー栽培や養蚕で生計を立てていたことが、参考文献 13) に記されており、林が本格的に大工として活躍した時期については今後の研究に委ねるものとする。

注 11) 入植直後は現地人のカボクロが居住していた掘っ建て小屋が第一期の住まいであったが、事業が軌道に乗り日本人大工の手による住まいが第二期にあたる。桂植民地の日系移民住宅を写した幻燈用の種板からは、「欠き込み型」の窓枠を確認でき、同一カットのものが 1915 年に刊行された『ブラジル移植民の真相』に掲載されていることから判断した。

参考文献

- 1) 田中和幸、渡邊裕子、須崎文代、内田青蔵、脇岡明美：ブラジル連邦共和国レジストロ市における戦前に竣工した日本人の移民住宅 その 7 断面寸法から見る二階建て住宅の特徴について、日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集（建築歴史・意匠）、pp.651-652, 2021.9
- 2) 田中和幸、渡邊裕子、須崎文代、内田青蔵：ブラジル連邦共和国レジストロ市における戦前に竣工した日本人の移民住宅 その 5 深澤邸から見る真壁造りの窓枠形状について、日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集（建築歴史・意匠）、pp.645-646, 2019.7
- 3) 田中和幸、渡邊裕子、須崎文代、内田青蔵：ブラジル連邦共和国レジストロ市における戦前に竣工した日本人の移民住宅 その 3 沖山スズ邸の現状と架構形状について、日本建築学会大会（東北）学術講演梗概集（建築歴史・意匠）、pp.907-908, 2018.9
- 4) 共同研究報告書建築編：ブラジル日本人入植地の常民文化、神奈川大学常民文化研究所、2021.3
- 5) 上田篤：ブラジル南部外国人移住地域における住文化変容に関する比較調査、昭和 55 年度文部省科学研究費補助金－海外学術調査報告書、1982.3
- 6) Morioka, T., : Urban Development and Community Management by Japanese Immigrants in a Colony in Brazil, Papers of the Research Meeting on the Civil Engineering History in Japan, Vol.3, pp.111-118, 1983 (in Japanese)
盛岡通：ブラジルにおける日系移民のまちづくり－サンパウロ州レジストロでの事例研究－、日本土木史研究発表会論文集、3 巻、pp. 111-118, 1983
- 7) 熊谷広子：レジストロに見られる移住地形成期の住宅の型 ブラジルにおける日系移民の住空間の変遷に関する研究、日本建築学会東北支部研究報告集 計画系、68 巻、pp.201-204, 2005.6.10
- 8) 新村美沙紀：愛知県 登録有形文化財明治村ブラジル移民住宅 日系移民住宅の材料と技法、文建協通信、126 号、pp.139-142, 2016.10
- 9) IPHAN : Bens Culturais da Imigração Japonesa no Vale do Ribeira Registro e Iguape, available from
(<http://www.nomads.usp.br/wp/patrimonioculturalcolaborativo/estudo-s-de-casos/bens-culturais-da-imigracao-japonesa-no-vale-do-ribeira/>) , (accessed 2021-05-31)
- 10) Rogério Bessa Gonçalves : O sincretismo de culturas sob a ótica da arquitetura vernácula do imigrante japonês na cidade de Registro, São Paulo, Anais do Museu Paulista. São Paulo.N. Sér. v.16. n.1, pp.11-46, Jan.- Jun. 2008
- 11) Larissa Lie Nagase : PRESERVAÇÃO DA ARQUITETURA DA IMIGRAÇÃO JAPONESA NO VALE DO RIBEIRA: INVENTÁRIO, CONSERVAÇÃO E RESTAURO, XII Jornada de Iniciação Científica e VI Mostra de Iniciação Tecnológica , Universidade Presbiteriana Mackenzie, 27 A 29 DE SETEMBRO DE 2016
- 12) Akemi Hijioka : MINKA-Casa dos Imigrantes Japoneses no Vale do Ribeira, Instituto de Arquitetura e Urbanismo, USP, 2016 (サンパウロ大学・学位論文)
- 13) 安中末次郎社：伯刺西爾イグアッペ植民地廿週年記念寫眞帖、海外興業株式会社、1934
- 14) 松村俊明他編：レジストロ入植五十周年記念寫眞帳、レジストロ連合青年会、1963.12
- 15) 内田青蔵：戦前期のブラジル移民の建築遺構 レジストロ植民地の事例、比較民俗研究、28 巻、pp.203-213, 2013.11

[2021 年 6 月 2 日原稿受理 2021 年 8 月 10 日採用決定]